

## Special Issue | 一震災1年を前に一

# 大槌町復興プロジェクト代表の西村幸夫教授 「まちづくり全力で支援」

東日本大震災で人口約1万5千人の1割が死亡、行方不明になるなど、壊滅的被害を受けた大槌町が、本学とともに復興に向けて歩き出している。同町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターが被災した本学は、同センターとまちの復興を支援するため、都市デザインや景観工学、海岸工学など、さまざまな研究者によるチームを結成。被災者に寄り添い、被災調査から復興計画、実践まで総合的に支援している。プロジェクト代表の先端研の西村幸夫教授（都市デザイン）は、「何をどう生かしてまちを再生するか。地元の人と一緒に考えながら、急ピッチで進めていきたい」と力を込める。

### 壊滅的被害の町

津波や火災によって、多くの建物が被害を受け、街並みも失われた大槌町。昨年5月、西村教授らが初めて同町を訪れた際に目にしたのは、倒れた堤防や散乱しがれき、津波で流されて民宿の上に乗っかっていた船など、信じがたい光景ばかりだった。

国際沿岸海洋研究センターの建物自体は無事だったが、3階まで水が入り、実験設備は全て使用できなくなった。しかし、同センターは大槌に残り、再出発することを決めた。

本学のキャンパス計画室長でもある西村教授は、「大槌町はこれまで研究を理解し、本学を応援してくれた町。震災前から良好な協力関係を築いていた。大槌の復興を支援することはお互いにとってプラスになる」と語る。

### 好きだった場所を残す

プロジェクトメンバーは、まず町内を歩き、浸水状況や地盤、

堤防の状態など、被災状況を調査。こうした基本的な調査に加え、地域の方から昔の写真や地図、文献などを提供してもらい、人々が集う広場や湧水があった場所、古い街道や夏祭りの神輿のルートなども調べた。

町内の2つの神社を中心に行う大槌祭りは、地域の人々にとって、一年のうちの最大のイベントであり、神輿のルートは大切な道。ルートを調べるのは、復興計画を考える際に、こうした人々の思いを反映させるためだ。今年1月には文化庁の委託調査の一環として、好きだった場所の記憶や被災前の写真を募集するイベント「大槌記憶再生プロジェクト」を実施。200ヶ所以上の記憶と600枚以上の写真が集まった。

### 可能性を引き出す

大槌町は昨年10月から、町内を10地区に分け、住民と町職員が共に地域のあり方を協議する「地域復興協議会」を設置。

被災した大槌町役場（2011年5月）





センター近くの海岸を調査する西村幸夫教授 (2011年5月)

プロジェクトメンバーは、まちづくりの専門家として協議会のコーディネーターを務め、各地区の住民は自分の町の将来像について白熱した議論を重ねてきた。

国際沿岸海洋研究センターがあった赤浜地区の住民は、復興協議会ができる前から「赤浜の復興を考える会」を組織していた。工学部都市工学科の学生がつくった畳4畳分の地形模型をもとに、住民が紙粘土で色づけした将来像の模型を作製し、「ここに公園をつくりたい」、「海が見える場所に住みたい」などと議論。まちづくりのイメージを膨らませ、昨年10月にいち早く復興計画案を地元から町役場に提出した。



赤浜地区のコーディネーターを務める黒瀬武史助教

復興計画を策定する上で、住民がもっとも頭を悩ませたのが、安全性を担保するため防潮堤を高くするか、高台移転をするかという選択。赤浜地区は、防潮堤は震災前の高さ(6.4m)のまま、海拔15m以上の高台に移転することを選択した。同地区のコーディネーターを務める工学系研究

科の黒瀬武史助教は、「まちづくりの専門家の役割は、何かを押し付けるというより、地域が持っているももとの力や可能性を最大限引き出すこと。工学的に必要な機能や安全性は担保し、大槌のこれまでの歴史がこれからの空間にどう生かされるべきか、ということを大切にしたい」と語る。

さまざまな議論を経て、昨年12月末、大槌町の復興計画がまとまった。まちづくりのコンセプトは、「海が見えるつい散歩したくなるこだわりのある美しいまち」。西村幸夫教授は「まちの人の人生がかかっているまちづくりで、我々の責任も重大。これからも大槌の復興を全力で支援していきたい」と語った。

プロジェクトメンバー (敬称略)

共同代表:西村幸夫(都市デザイン、副学長)、中井祐(社会基盤工学科) 大竹二雄(国際沿岸海洋研究センター長)、田島芳満(海岸工学)、黒倉嘉(水圏生態学)、窪田亜矢(都市デザイン)、福井恒明(景観工学)、川添善行(建築設計)、尾崎信(景観工学)、永瀬節治(都市デザイン)、黒瀬武史(都市デザイン)

地域の意見をまとめるため、復興計画案について議論する赤浜の方々 (2011年10月)

